



双眼望遠鏡の世界



同志社大学心理学部 教授

畑 敏道 (はた としみち)

浜松医科大学医学部教務員, 同志社大学文学部准教授, 同志社大学心理学部准教授を経て, 2014年より現職。博士(心理学)。専門は生理心理学, 行動学的神経科学。著書は『心理学概論(第2版)』(分担執筆, ナカニシヤ出版)など。

小さいころから星を見るのが好きで, 初めて買ってもらった望遠鏡で土星を見たときのゾッとするような感覚は今でも鮮明に覚えているような気がしますが虚偽記憶でしょうか。その後お年玉を貯めてさらに大きな望遠鏡を買い, 自宅の物干し場から星を眺めていた第1のピークが小学生から高校生のころ。大学在学中まではなんとなく続けていましたが, 大学院入学後はまったく遠ざかり, それから20数年。この間, たまに夜空に星を見かけても「はい, フォーマルハウトですね, 秋ですね」くらいにしか思っていないませんでした。ところが学部の新入生オリエンテーション合宿に実家の物置にしまってあった望遠鏡を持ち込み, 学生や先生方とぼつりとした土星や, だろんどろんと渦をまく木星の縞模様をウウウムと堪能していたときに, なんともいえない妙な感覚がよみがえってきました。やけぼっくに火がついたのです。それから3年ほど, 今は第2のピークに突入しています。20年以上経っていても, 星空はほとんど変わりません。しかし, それをとらえる機材の側にはある「革命」が起こっていました。

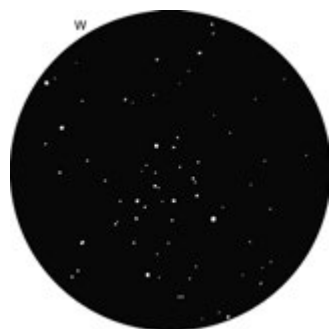
それは鳥取県で眼鏡屋さんを営まれている松本龍郎氏が考案された「双眼望遠鏡」(双眼鏡にあらず)の登場です。これは右眼用と左眼用の2本の屈折望遠鏡を並べ, 松本さんが世界に先駆けて(というか唯一)開発されているEMSという革新的な装置をとり

つけることによって, 星空を正立(屈折望遠鏡は通常の使用状況では鏡像〔裏像〕になっている)・双眼視できるというもので, 世界中から注文が絶えないそうです。僕もこのEMSを入手して双眼望遠鏡を自作し, 主に光害の激しい京都市内から星を眺めています。

これのどこがすごいのか。以前は, マカロニの穴のような狭い視野(40度ほど)を片目だけで覗くのが当たり前でした。しかしこれではモノラル・イヤフォンで音楽を聴いているようなものです。たしかに音の「知覚」は得られますが, ステレオ・ヘッドフォンで聴いて初めて臨場感・没入感といった「体験」に格上げされます。あるいは水族館で, 水槽のガラス越しの魚を(片目で)見ることと, シュノーケリングで目の前の魚を見ることとは, 体験として全く違ったものであることは容易に想像できます。実は望遠鏡もこれと同じで, 広い視野(接眼レンズによっては100度超!), 正立像での双眼視によって「宇宙シュノーケリング体験」とも言うべき臨場感が得られ, 砂粒をまき散らしたような星々がチカチカとまたたく「肌触り」に陶然としてしまいます(ペルセウス座の「二重星団」の美しさといったら……)。一度これを体験してしまうと, もう狭い視野・裏像・単眼には戻れません。「双眼病」と呼ばれるゆえんです。「臨場感」研究の格好の素材だと思いますが, 残念ながらMRIには入りません。

日本では天文趣味というと写真撮影派が大きな割合を占めているそうです。僕は「眼視派」で, まだ両目が見えているうちに, 遠路はるばるやってきた光子を少しでも多く, カメラの撮像素子なんかにはではなく, 桿体細胞に投入してやって, 宇宙の中に「ある」ことの妙味をできるだけあじわいたいと思います。これは撮影とは別の欲求です。

というわけで, 夜中に太いパイプ状のものを担いで歩いている人を見かけたときにもどうかすぐには通報されませんように, まずはひょっとして天文ファンかな, と思っていただけますとありがたいです(実際, 学生時代に京都御所の前〔大学の前〕の道を望遠鏡を担いで歩いていたときに職務質問を受けたことがありました)。僕たちの視線はズドンとうちだしたその放物線の落下地点にはではなく, 遠く天空に向かって直進していることをご理解いただければ幸いです。



散開星団 M39 のスケッチ (2016/8/11 22^h51^m, Borg 100mm achromat bino, Hyperion 21mm [30倍], Matsumoto EMS)